

政策羅針盤シリーズ:ワークショップ・レポート

GPI ワークショップ

「繋がり」から新しい政策仕組みづくりへ
—飯舘村「までの力」モデルから

2012年1月21日

於:関西学院大学 東京丸の内キャンパス ランバスホール



東日本大震災から1周年の3月11日の今日、次の世代により良い社会を残すための政策議論が活発化することを願って本レポートを発行する。

発行:グローバル政策イニシアティブ (GPI)

編集:GPI 編集委員会

e-mail: info@gpi-japan.net

www.gpi-japan.net

© Global Policy Initiative 2012

GPI ワークショップ
「繋がり」から新しい政策仕組みづくりへ
—飯舘村「までの力」モデルから

2012年1月21日(土) 於:関西学院大学 丸の内キャンパス ランバスホール

プログラム

第一部:特別講演

スピーカー

菅野 典雄 福島県相馬郡飯舘村村長

「までの力」

モデレーター

小池 洋次 関西学院大学 総合政策学部教授

第二部:パネルディスカッション

モデレーター

小池 洋次 関西学院大学 総合政策学部教授

パネリスト

菅野 典雄 福島県相馬郡飯舘村村長

保井 俊之 慶應義塾大学先端研究センター特任教授

清水 美香 GPI共同ディレクター・米国東西センター、上智大学

1. まとめ (GPI羅針盤運営委員会)

今次ワークショップでは、「繋がり」をテーマに、東日本大震災後の日本社会の方向性について議論を行った。被災地の至るところでコミュニティの「繋がる力」が見出される一方で、公共政策上の繋がりには多くの問題が散見される。今私達が被災地が抱える様々な問題の根源は、日本社会システムそのものにあることを重視し、人々の英知を巧みに繋げながら、新しい政策仕組みづくりに繋げることが今後の社会の鍵を握るのではないかという問題意識から実施された。

本ワークショップの基調講演(同講演の全容を次項に記している、ぜひご覧ください)をいただいた福島県飯舘村の菅野村長は、近年、その繋がりコンセプトのベースとする「までの」な村づくりに尽力されてこられた。東日本大震災以降、原子力災害の影響で全村避難を余儀なくされた今も、「までの」の考え方を機軸にして、避難のみならず、雇用や教育などあらゆる難題を視野に入れながら果敢に取り組んでおられる。「までの」は「ゆっくり、丁寧に、心をこめて」などを意味する方言から由来するものでその解釈は様々あるが、より社会に近づけてみると、人、資源などあらゆる繋がり重視して、その繋がりを生かし、循環社会をつくり、次世代に社会を繋げていくことと理解できる。

さらに特筆しておきたいことは、飯舘村が抱えている問題は、飯舘村、福島、東北の問題に限定されるのではなく、日本社会の時代の転換期における問題であることである。菅野村長は、この時代の転換期において時代の流れを読むか否かが今後の日本の社会を左右するという事、その流れを読むには柔軟な考え方を持っていること、固定観念を持たないことが鍵を握ることを指摘された。

ワークショップ・レポート

最後に、東日本大震災後の日本の社会の方向性を考えるにあたって、菅野村長の「今よりもいいものを次の世代に残していくんだという思いを誰が持っているだろう」というメッセージは、我々に1つの示唆を与えているのではないだろうか。

東日本大震災およびその後の復興過程における混乱は、日本社会全体システム全体に大きな課題を突き付けている。菅野村長の講演を踏まえた、具体的な政策的示唆は、各コメンテーターのプレゼンテーション (<http://www.gpi-japan.net/event/workshop/471/>に掲載) を参考にしていきたい。

2. 特別講演 「までの力」

福島県相馬郡飯館村 村長 菅野典雄

(講演記録：須藤晶子、編集：GPI編集委員会)

はじめに

今回の原発事故で6,000人の人口の飯館村が全村避難になりましたが、いったいこの災害をどういうふうに捉えて、どう考えて、どういうふうに将来について考えたらよいのか、私なりに考えていること、また実際に起きたこととお話させていただければと思います。

その前に私なりの日本観をお話させていただきたいと思います。15年くらい前から、日本は第3の転換期に入ったと、識者の方はお話をしていました。第1はたぶん明治維新なんだろうなど。そこから新しい日本がスタートしたと。それから7、80年経って、日本は戦争に入って、戦争に敗れたことによって、そこから新しい戦後の民主主義がスタートした。

第1の大きな転換期で武士の時代が終わりを告げ、第2の転換期には、軍人の時代がなくなった。

まだ世界には、軍人が幅をきかせて戦争やクーデターをやっているところもありますが、日本は幸いに戦争に敗れたことによって、この民主主義がスタートして、私たちはこうして平和な国に生きていられる。

幸いに戦争に負けたと言いましたけれども、これはたいへんな冒瀆であります。国のために尊い命を落としていった多くの皆様方のおかげで私たちはこうして平和な国に生きていられるということではないかなと、ほんとうに改めて、忘れてしまっているかもしれませんけれども、感謝をすべきと思います。

では、武士が終わりを告げ、軍人が終わりを告げ、第3の転換期で何が滅びていくんだというと、たぶん、私は時代の流れを読めない者が滅びていく、ということではないかと。

なぜ、気づかないできたかということ、第1、第2のように血を見ることがなかった、あるいは、全日本的な話ではあったんですけども、血を見ることがなかったので、気づかないできてしまった、というところもあるのではないかと思います。

それは最後の話のなかに続けさせていただきたいと思います。

世界一「安全な国」から「危ない国」へ

もう一つ、日本のなかの動きとして、私は、日本人に生まれてほんとうによかったなと、ずっと思ってきました

ワークショップ・レポート

た。なぜか。

世界一、安全な国だからであります。都会はいざしらず、田舎も少し変わってきましたが、玄関など別に閉めなくても、泥棒が入ることもなかったし、少なくとも名前を書いておけば荷物は戻ってきた。エリアをちょっと狭くすれば、名前など書かなくても、「あれ、これたぶん、あの人のだよ」ということで戻ってきたわけですが、外国はそうにいきません。絶対身から離すな、あるいは、取られたらば、取った人が悪いのではなくて、取られた人が悪いのだと、こういうレクチャーを受けて、普通、海外へ行くはずでありますから、そういう意味で、日本は世界一安全な国だなどと思ってきたんですが、どうも世界一危ない国に近づいているんじゃないかという気がしてなりません。

この5、6年をみても、姉齒事件というのがありました。いわゆる設計をごまかして、自分の仕事を増やしたという方です。震度5で倒れるマンションがけっこう建ったんじゃないかという話であります。

福知山線の脱線事故というのもありました。電車の事故では最大でありますね。100人も人間をペしゃんこにしまったということでもあります。

それから、食品の偽装も跡を絶ちません。オレオレ詐欺もあります。まだまだ、いっぱいいろいろな事件があります。

今話したようなことは、みんな要因はまったく違います。

が、一貫して言えることは、戦後一貫して、効率一辺倒に、スピーディに、お金がすべてのすべてだという基準、価値観で進んできた後遺症が今、日本中で吹き出している、ということではないのかなという気がします。

いわゆる効率とか、スピード、お金はこれからも大切な基準でありますけれども、それが10分の10という価値観で進んできますと、どうしても人と人との繋がりが希薄になってくるはず。当然、スピードについていけない人もいますし、お金についても当然いろいろな人がいるわけですから、それが10分の10の世の中の基準ということになりますと、人間関係の繋がりが薄くなって、自分さえよければ他人はどうなってもいいという、この事案が起きてくるということではないのか。

先ほど第3の転換期という話で、時代の流れを読めない者が滅びていく、とお話しました。

新しいことがすべていいというつもりはありません。私たちは、大切なものをずいぶん、置いてきてしまったということもあると思いますけれども、少なくともこれだけ、時代の流れがどんどんとスピードを増していますと、ある程度、時代の流れを読む必要があるんだろうと、そのためにはやはり柔軟な考え方を持っている必要があるんじゃないかと。固定観念を持たない、ということでもあります。

世の中とは、会社とはこういうもの、家庭とは、結婚とは、男とはこういうもの、何でもいいですけれども、こういうものだという固定観念をもって、そこから一步も脱却できないという硬い頭を持っていたのでは、滅びていくという可能性もあるんじゃないかと、このように、思っているところであります。

今までこうだったからこうだという固定観念をもって、そこから一步も脱却できないという硬い頭を持ってい

ワークショップ・レポート

たのでは、なかなかやはり、時代に乗れなかったり、労多くして身を結ばず、ということがある時代にもうすでに入っている、これが第3の転換期なんだろうなという気がします。

そしてもう一つ、世界一安全な国がどうも、危ない国に近づいているという気がしています。

「までいライフ」

そうしますと、さて、どういうふうに考えていけばいいのかなと思うんですが、実は飯舘村で、私の責任で10年計画を作るといえるときに、今のような考え方を持っていましたから、いわゆるスローライフというコンセプトで、各部署で10年計画を作ってくれないかという話をしたんですね。

そうしたら、その日のうちに職員の間からブーイングが起きました。もう、道路などは作らないのかとかですね、農業、産業振興はしないのかとか、こういうことであります。

それからだんだんスローライフが村内に広まってくると、今度は住民のほうから「役場の悪いところはスローなのに、もっとスローにする気か」と、こういう話でありますね。けして、そんなこと言っているわけではない。毎日、職員にはスピーディにやれとこういうふうに言っているわけですから。

ただ、少なくとも、戦後一貫して、スピードは善でスローは悪だという固定観念を私たちは持ってきたわけですから、スローという言葉を使うと、今度は、スローが善でスピードが悪なのか、と捉えてしまうということではないのかなという気がします。

決して、効率もスピーディにやるのも、お金も、大切な基準でありますけれども、10分の10という時代ではもうなくなってきている、ものによっては1対9かもしれないし、5対5かもしれないけれども、少なくとも違う価値観というものもしっかりと考えていかなければならない時代にきているということではないのかなと、このように思っています。

したがって、なかなか思うに任せないと思っていましたら、ある方が村長がいわんとしているスローライフは「までいライフ」と置き換えてもいいんじゃないの、という話になったわけであります。

「までい」という言葉は、私たちの地方の方言です。たとえば、こんなふうに使っておりました。私らが小さいころですね、「までいに子供を育てないと、後で苦労するよ」「までいにごはんを食べないと、ばちが当たって目がつぶれるよ」。だから、一粒、一粒しっかりと食べなさいと、こういう話であります。

なんとなく、雰囲気としては皆様がたもわかると思いますが、いかんせん方言かと思ってははどうしようもないなということで、辞書で調べてみました。すると、あ、これがたぶん語源なんだというのが見つかりました。安い辞書には載っていませんけれども、真実の真に手と書いて、「真手（まで）」であります。これがどうも、語源だなという気がします。までがまでになったり、までいになったり、ということでこれが語源だろうと。辞書にはどういう説明があるかというところ「左右そろった手。両手」と出ています。

つまり、お茶を出すのも、両手で差し出すのがほんとうの出し方だよ、という話ですし、グローブでボールをとるときにも、そういえば、小さいころ、こっちの手を添えろよと、言われたような気がする。別にグローブで取れるんですけども、万が一のときに、こちらの手を添えていると、万が一の落球が防げますよ、という

ワークショップ・レポート

ことなんだろうなという気がします。

そういう意味からすると、基本に忠実にといいますか、丁寧に、大切に、念入りに、じっくりと、時間をかけて、とか、手間暇惜みせず、心を込めて、慎ましく、もったいない、とか、この両手というところから、いろいろな言葉が包括できると、こういうことかなという気がして、スローライフと直接的ではないけれども、そう遠くもないかもしれないなということで、飯舘村は「までいライフ飯舘」ということで、10年計画を作って、そろそろ後半、23年度は7年目に入るということで、そのまとめをしていかなければいけないなというところで、今回の全村避難ということになってしまった。非常に、悔しくてならない、こういうことであります。

そうしますと、今流に言えば、「までい」は資源を大切にすることではないのかなと、という気がします。それから、心を込めてということになりますと、やはりそこに人と人との心の繋がりも当然考えなければいけないのかなという気がします。

いずれにいたしましても、ない物ねだりをするのではなくて、あるもの探し、あるもの生かしをしていくと、こういうことになるのではないかと、このように思ってきました。あるいは、循環社会をやはり作って行く、ということではないのかなと。

ですから、10分の10ではないよ、というところなどを、どういうふうに表示していくかなということで、悩んだ結果ですね、たとえば、飯舘村でもですね、までい「思いやりピンポン大会」というのをやり始めておりました。までいライフのスタートと一緒にですね。卓球大会はどこでもやっている。むしろ、今はブームかもしれません。

わたしのところは、ちょっと違います。ふつうの卓球というのは、相手に強いサーブを打って、打ち負かして勝つ、というのが当たり前の話であります。

これが卓球だというのは、誰も疑いようのない事実でありますけれども、私のところの卓球は、相手が返しやすい球を打って、時間内に何回続けられるかということで、夫婦の部とか、親子の部とか、子供の部があります。たとえば、夫婦の部あたりでありますと、奥さんのほうは真面目に返すんですが、男のほうは時々ですね、男ってというのはどうしようもないところがありますけれども、叩いてしまうんですね。そうすると、見ている外野の人たちが「なんだおまえ。30年連れ添った思いやりがそのサーブか」とジャブが入って、ひじょうに和やかな卓球大会になるということでもありますね。

今まで、ぎすぎすとせざるを得なかった卓球大会が、ひじょうに面白い和やかな。心が触れ合う卓球大会になる。ちょっと基準を変えることで、今までできなかったことができるよ、ということが言いたいわけですよ。先ほど言ったように、10分の10じゃないですよ、これからは、ちょっと基準を変えることで、今までできなかったことができるよと、言いたいわけですよ。これからは、ちょっと違う基準も大切になってきますよということを言いたいためにそんなことをやったりしているわけでもあります。

そのほか、いろんなことをやりました。「までいの力」という本が出ていますから、この本の中に、飯舘村がやってきたことがすべて出ておりますので、よかったら買っていただいとっております。

福島原発事故の被害

ワークショップ・レポート

そんな村が、先ほど言いましたように、放射能に汚染されて、全村避難ということになってしまったわけであります。

今、1,700の世帯が2,700世帯に増えました。普通ならば、増えるということは最高に嬉しいことではありますが、まったく逆であります。一軒のうちが、二つ、三つ、四つと分かれて暮らさなければならない。ということでもあります。田舎の大きな家ですから、2世代、3世代、場合によっては4世代くらい、一緒に住んでいる者が、避難先の仮の宿舍や、仮設やアパートに入れるかといったら、入れませんから。あるいは、仕事のこととか、子供の学校のことやなんかで、結局ばらばらになってしまう。ということでもあります。

しかも、特にあのある程度の年配の方は、自分の家にいれば、役割があるわけですね。ちょっと草をむしったり、片付けをしたりとか。お客さんが来たときにお茶を出すとか、いろんなことがあるわけですが、そういうのは、まったく閉ざされてしまうわけでありますから、ちょっと誤解があると困りますけれども、放射能に影響される体の害よりは、避難生活の害のほうがはるかに具合が悪いという状況を今、作っていると。こういうことではないかなと、こう思っています。

そのようなことで避難をさせられているわけでありますけれども、しかし、いったいなぜこういう形になってしまったのかと考えますと、今、これほど危険なものを扱っている会社としてはあまりにも危機管理のなさ、それから、我々が関東圏の経済産業を担っているという驕りがまさに隅々まで行き渡ったのではないのかなという思いでいるところであります。

どうも、会見をしている態度からは、これほど私たちを苦しめていることに対する思いというのは、残念ながら伝わってこないというのが、思っているところであります。

それから、よくこういう話をします。つまり、災害に重い・軽いはないなと思います。どんな災害も大変です。むしろ、その重い・軽いという話をするとしたならば、たぶん、津波で家を流された、あるいは、台風でどうしようもなくなった、あるいは、台風や津波で家族が亡くなったというのは、ほんとうに大変だなという気がします。

私の友達も今年、定年を迎える方なんですが、ちょっと聞いてみましたら、なんかそわそわしているんですね。そうしたら、津波で、妻と嫁と2人の孫が津波にやられましたと。私と息子の2人になって、家族が半分以下になってしまいましたと言う。その話を聞いたときに、私はもう涙が止まらなくて、言葉が出せませんでした。ですから、ほんとうに大変だなという気がします。

ですから、重い・軽いという話ではなくて、放射能の害はまったく特別だと、特殊だということでもあります。というのは、家族が亡くなった方も、涙を流して、苦しんでもがいて、ある程度、時間が経てば、それがどれくらいかはわかりませんが、さあまたゼロからスタートしようねという話に必ずなると思います、これは。

しかし、我々は残念ながら、ゼロからスタートするまでに、これから何十年も世代を超えて、不安と戦いながら、農地がやられていますから生活苦と闘いながら、何年も行かなければならない、ゼロに向かって、という話でありますから。

ワークショップ・レポート

こういう話をすると、多くの方は、そういえばそうだね、と必ず言ってくださいます。いわゆる重い・軽いではなくて、放射能の災害の特殊性というものに、我々、福島県は今、非常に苦しんでいる。特に、避難生活を余儀なくされている自治体は。

第3の転換期：いい国をつくろう、何度でも

先ほど、第1の転換期で武士の時代が終わりを告げた、第2の転換期で軍人の時代が終わりを告げた。第3の転換期は、ずいぶん前から来ているのに、私たちは気づかないできてしまったということをお話しました。

このまま日本が相変わらず、今のままの思いでいったらおかしくなるよ、という警告なんだろうというふうに、私は思っているところでもあります。

たとえば、今まで私たちはものの豊かさというのを求めて、ずっときたわけであります。どちらかというと、足し算的な発想で。ですから、それがちょっとこう、経済成長の下がり気味に対して、もう一度バブルみたいなものがぜひきてほしいということで、きているわけでありますけれども、実はそうではなくて、むしろ引き算的な考え方のなかにほんとうの豊かさとか、幸せというものがあるんじゃないかという考え方になっていく必要が、もう10数年前からあったはずなのに、気づかないできてしまったという。

まだまだ、経済成長がすべてだと。たしかに経済成長というのは、人間の生活を豊かにする魔法の杖ではあるけれども、それがすべてではない時代がすでにきているのではないかと。今回、ブータンの国王夫妻が来たことが非常に騒がれたというのは、なぜなのか。この災害のときに。やはり、そのあたりを考える機会と捉えざるをえないという雰囲気があったのではないかなと、私は思っています。

面積的には、九州ぐらいの国です。たぶん、人口は、70万かそのくらいですから、まあ、とてつもなく小さい国です。そのGNPは、たぶん日本の何千分の一ぐらいの話です。あちらはGNH、総合幸福度というのを、やっている。幸せですかと聞くと、9割以上の方が幸せだという話ですね。

日本はこれだけ、第2位、第3位に今はなっていますけれども、幸福ですかというと、どれだけ幸せですと素直に答えられる人がいるかということ、みんなやっぱりそれぞれ不満を持っている、ということではないのかなという気がします。したがって、そういうふうに考えますと、簡単に、今の日本のまま、いっていいという話ではないのではないかな。

それを、いわゆるその気づく機会といいますか、試練を、私たちに天は与えたのが、今回の原発事故であったり、東日本大震災ではないのかなという気がしてなりません。

ギリシャは今、ちょっと危なくなっていますけれども、アテネの市民になるときに誓約、約束事をさせられていたという記事がある雑誌に載っていました。

どんな約束をさせられていたかということ「私たちは、この都市を私たちが引き継いだときよりも、損なうことなく、よりよくより美しくして、次の世代に残します」と約束させられていたという話なんです。

これは、もうすごい前の話であります。では今の我々が、自分の心のなかに、今よりもいいものを次の世代に残していくんだという思いを誰が持っているだろうと。自分が今、幸せにさえなれば、なにせどんどんという

ワークショップ・レポート

ことで、エネルギーをどんどん使って、経済を発展させて、自分たちの満足を作ってきたということもあるのではないのかなという気がしてなりません。

ですから、そういう意味からすると、第3の転換期を気づかないできたけれども、そろそろ気づくべきときなのかなという気がします。

これは、ある雑誌社が10年前に出した広告であります。「国会議事堂、解体」。地方に行って、芝生の上に座ってやれと。あんな赤絨毯の上で、あーおーあーおーと騒いでばかりいて、日本の進路を決められないから、こういうところに行けば、もっとスピーディに物事が決められるんじゃないの、というのが、この雑誌が2面を使って出した広告であります。通常国会をテントを張ってやっているという広告であります。

今年は、どんなのを出すのかなとひじょうに興味を持っていました。そしたら、「いい国を何度でも作ろう」ということで、マッカーサーがパイプをくわえて飛行機から降りてくる、もうこの写真は教科書にも出ていて、皆さんも知っているはずでありますね。ここから新しい日本がスタートして、今、私たちはこうして平和なところに住んでいるわけですがけれども。今度の大地震、原発事故を契機に、また、いい国を作って、次の世代にバトンタッチしようではないか、ということを行っているわけであります。

まさにこれは、東北、福島県、我々だけの話ではなくて、日本国民一人ひとりが、いったいこの災害をどういうふうと考えて、どういうふうに行動を起こし、どう暮らしていけばいいのかということまで考えなさいよ、というのが、私はこの、いい国を作ろう、何度でも、ということだろうと。何回も作るのはいくつかもありませんけれども、少なくとも、これを機会にということであります。

しかし、残念ながら、第1、第2は日本全体の問題でありましたが、今、この第3の転換期「いい国を作ろう、何度でも」という話は、東北の問題、福島県の問題と思っている方がほとんどで、果たして、この第3の転換期にいけるかどうか、私は非常に心配です。

私たちは次の世代に、世界から尊敬される日本を残していけるのだったら、この大変な避難生活、苦しいですけども、自分のふるさとを追われたのも、まあ、頑張っていけるなという気がいたしますけれども、それがまったく東北だけの話というので終わられたのでは、まさにお墓に入って憤懣やるかたないということになるのではないかなという気がします。

ですから、今度のこの東日本大震災、原発事故というものは、北海道から沖縄までそれぞれの人が、やはりこれから次の世代にいい日本をどう残していくかという一つの試練、あるいは機会を与えたんだと、そういうふうと考えていく必要があるのではないかな。あくまでも、時代は変わっているわけではありますから、固定観念にとらわれずに、しっかりと先を見ていくということが必要ではないかと、思えてきている。そうであれば、避難生活、苦しいですけども、なんとか頑張っていける。という思いでありますので、皆様もたもそんな思いでいただければ、幸いですというふうに思っています。

(了)

**GPI Brief —for Guiding Policy Innovation (政策イノベーションに向けて)
特徴と枠組み**

GPI Brief は、グローバル化と公共政策の連関性を重視し、政策形成あるいは実施方法の刷新(政策イノベーション)を促すために、世界各地の政策専門家および実務家が官民双方の政策コミュニティを中心とする読者層を対象に、最優先課題に焦点を当て、論述を重ねるオンライン・ジャーナルである。副題にある「イノベーション」とは、一般的には科学技術分野で多用されるが、ここでは、より包括的領域、より将来を見通した思考、それに基づく取り組みを指す。新規アイデアに焦点を当てる「イノベーション(発明)」とは異なり、既存・新規両方のアイデアを有機的に組み合わせ、練り直し、問題解決型のアプローチのためのナレッジを再創出する点を重視する。主に、「研究ノートシリーズ」と「政策羅針盤シリーズ」を設けている。

政策羅針盤シリーズ:「政策羅針盤シリーズ」は、「政策羅針盤会議」の視点から、政策コミュニティおよび一般読者に、優先的政策課題を端的に提示し、政策インプットを提供することを目的とする。政策羅針盤運営コアメンバーは、清水美香(GPI 共同ディレクター)、古賀慶(GPI 共同ディレクター)、野呂尚子(GPI アシスタントディレクター)、五十嵐千恵(GPI 事務局代表)、鈴木崇弘(GPI 顧問)他。